６月２７日「福音家族」使徒言行録４：３２～３６

私の中の一番最初のキリストの体験（教会ではなく、キリストの体験）は中学２年生の冬休みに父に無理やり連れていかれた、名古屋でのホームレスの方々への炊き出し支援でした。そこで、今、初めて会った人たちと一緒に食事を造り、それを知らない人たちに配り、それを受け取った知らない大勢の大人たちから「ありがとう」と言われた。衝撃の体験でした。ある意味、疑似的な家族がそこにあったように感じた。それが、先週もお話ししましたが、５０００人の給食においてキリストがされたことで、聖餐式を通して今も私たちが繰り返し受け止め続けている出来事だと気づいたのはずいぶん後になってからです。

この体験は、驚きと喜びと同時に一つの「恐れ」を私に抱かせました。炊き出しを受けに来ていた人の中には、いわゆるホームレスの人だけでなく、普通（に見える）の人もたくさんいたことです。「食べるものが無くて困っている人はこんなに居るのか」と驚かされた出来事でした。つまり、いつでも自分が収入を失って、路頭に迷う可能性があるという恐れを中学生ながらに抱いたのもこの時です。

今日の福音書はイエスの「思い悩むな」と言う言葉が選ばれていました。「**だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな。**」（マタイ６：25）この言葉、毎年６月の「花の日」近くになると「野の花を見なさい」がありますので、主日礼拝、子どもの教会、キリスト教保育の日課、どこかで必ず選ばれるのですが、実は毎年困っていました。どうしても「腑に落ちないな」と思ってたからです。というのは、良く注解書などではこう説明をされるからです。「ここで『思い悩むな』と言われている人たちは、明日の献立とか、遊びに行く服装のことを『思い悩むな』言われているのではありません。ローマに支配されて貧しく本当に毎日の食べ物や着るものに困っていた人たちを前にイエスは語られたのですよ！」私としては明日の献立とか、遊びに行く服装くらいで悩むな！って話の方が納得できるのです。「そりゃそうだ！そんな小さなことでクヨクヨ悩むなと。」ところが実際には、本当に明日食べるもの、明日着るものがない人たちが思い悩んでいる。それは当然じゃないですか！？どうしてイエスはその

人たちに「思い悩むな！」と厳しいことを言われたのだろうと疑問だったのです？先ほども言いましたが、私は中学生ながらに、誰でも少しのことで失業して、路頭に迷う可能性があることに気付いていいました。どれほど成功しているように思えても、誰でも落ちぶれることがある。じゃあ、どうすれば不安から解消されるのだ！？ずっと心配だったのです。「思い悩むよ！」っとイエス様に言いたくなるのです！

さて、中学生の頃の、炊き出し支援活動から、ずっと「思い悩み」を抱えていた私です。大学でもそのことへの興味は尽きなくて、社会学部で開講されていた釜ヶ崎、山谷などのドヤ街の研究の授業を受けました。そこで講師の方は私と同じ課題意識を持っていてこう話されました。「ホームレスは特別な怠け者や勉強しなかった者ではなくて、会社が倒産したり、病気で働けなくなったり、ほんの少しだけ運の悪かった人だ。そして、そういう人を怠け者で愚か者で『ああならないように』と皆が蔑みながらも、心の奥底で同じ境遇になるのを恐れるのではなく、社会の中にセーフティーネットを造って（生活保護などすでに多少は整備されている）、誰もが露頭に迷うことのない、安心して生きられる社会にしていくのが良い。」この授業は腑に落ちました！求めていた答えに出会えた！と感動したことを覚えています。そして、最近、実はイエスも、そうやって、皆が少しずつ支え合って、助け合っていけば、落ちぶれたり、路頭に迷うことを畏れなくとも良いという話をしたのではないかと思い至りました。と言うのは、先ほどの「思い悩むな」は必ず富の話とセットで福音書には登場するからです。

マタイでは、この前に「神と富」の格言があります。「6:24 **あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。**」この格言の言わんとしていることは、つまり、富ではなく、神に仕えよということでしょう。ルカ福音書はもっと露骨で、愚かな金持ちのたとえ話があります。ある金持ちの畑が豊作でした。金持ちはその余りある収穫物をしまっておくための倉の建設に取り掛かります。時間がかかってようやく倉が完成し、「さあこれで何年分もの貯えが出来た、安心して飲み食いしよう」と思った矢先、金持ちの命は絶たれることになります。神さまからの声です「**愚かな者よ、お前が用意したものはいったいだれのものになるのか**」金持ちはなぜ愚か者と叱られるのか？せっかくのたくさんの恵み

を、一緒に働いてくれた同労者や、使用人たち、周囲の貧しい人たちと分け合おうとせず、独り占めして自分のために溜め込もうとしたからです。だから、私たちが教えられていることは「分かち合う」という生き方です。先週もお話ししました。神の前に奉げ、皆と一緒に分かち合うという生き方へとイエスは私たちを招かれるのです。皆がそうするなら、自分一人きりで明日の食べ物や着るものを何とか確保しようと、思い悩む必要はなくなります。そして、イエスは本当の意味で分かち合い、喜び合う関係性を「神の国」と呼び、そのために共に過ごす血縁を超えた人たちを「兄弟姉妹」と家族のように呼んだのではないでしょうか？晴佐久神父がイエスが築かれたそういう血縁を超えた結びつきを「福音家族」と呼んでおられました。なかなか素敵だなと思います。そして言われるのです。「**何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。**」血縁を超えた福音家族を築いて、神の国を実現していけば、おのずと明日の食べ物や着るものに心配しなくて良くなると・・・ということです。だから思い悩むな。もう思い悩む必要はなくなるのです。

ただ、本当にそんなことが出来るのでしょうか？今日の使徒言行録からはこんな言葉を聴きました。「**信者の中には、一人も貧しい人がいなかった。土地や家を持っている人が皆、それを売っては代金を持ち寄り、使徒たちの足もとに置き、その金は必要に応じて、おのおのに分配されたからである。**」初期の教会では分かち合いが真の意味で実現していて、貧しい人は１人もいなかったと確かに聖書には書かれています。本当に！？分かりません。ある神学者はここに登場したキプロス島のヨセフのように、お金持ちで感動的に財産を奉げた人が何人かいたことを、理想的に描いているのだとも言います。ただ、実際に初期の教会では分かち合いが実践されたのは確かだろうと思います。私たちの教会も創立当初には、三谷家などいくつか代表的な家族が先祖代々伝わる甲冑などを売り払って教会を建てる資金を造ったと伝え聞いています。

私としては今回、このことを使徒たち、つまりイエスの弟子たちが行うようになった、ということに注目しました。あの弟子たちが、分かち合いを実践できるようになったのです。つまりイエスから、「思い悩むな」と言われなければ思い悩みに囚われ続けていた居た弟子たちです。５０００人ものお腹を空か

せた人たちを前にして、「**群衆を解散させてください。そうすれば、周りの村や里へ行って宿をとり、食べ物を見つけるでしょう**」と言い放った弟子たちです。もう手に負えないから、お腹を空かせていても知らん顔して放り出しましょう！そんなことを平気でイエス様に提案していたあの弟子たちが、分かち合い、喜び合い、1人も貧しいものがいない共同体を作り上げたということです。本当に驚きです。一体、この間に何があったのでしょうか？

私は、牧師として気を付けていることがあって、それは入院された方にはなるべく早く会えるうちに会いに行くということです。というのも、自分の祖母に会える機会に会いに行かず、それが最後のお別れになった苦い経験があるからです。福音書と使徒言行録のあいだに弟子たちに起きた出来事とは何か？それはイエスの死と復活です。弟子たちはそのことをきっかけに変えられたのではないでしょうか？弟子たちはたくさんイエスに分かち合ってもらっていたはずなのに、最も苦しい痛みをイエスと共に分かち合うことは出来ませんでした。弟子たちはたくさんイエスから受け取っていたはずなのに、イエスの飲む杯から飲むことが出来ませんでした。あんなに大好きで慕っていたイエスを見殺しにしてしまった、裏切ってしまった、更にその上に、イエスは弟子たちの裏切りをも打ち消す愛と復活を見せてくださった。その罪と赦しの出来事が弟子たちを変えたのではないでしょうか？今度は分かち合う者となろうと！

イエスと同じことをしよう！これはなかなか難しいです。神の子救い主と私たちとの間には大きな隔たりがあります。けれども弟子たちにできたことであるならば、私たちにも出来るはずです。私たちも変われるはずです。私たちもイエスの愛を知り、聖霊の恵みを注がれているのですから。私たちもこの教会を「福音家族」にしていけるはずです。先行きが見えない時代、困っている人はたくさんいます。私たちが受け取っている恵みを自分たちの中だけで終わらせない、教会の外へと、この建物の外へと分かち合っていく。兄弟姉妹と呼び合える人たちを、福音家族の枠組みをどうやって広げていけるのか・・・私たちは今、イエス様から課題を与えられているのではないでしょうか。